

「歴史認識問題について英語等により相互認識を深める演習科目」報告

法学部

真水 康樹

English language seminar deepened mutual understanding about Japanese historical issues

Yasuki Masui

During fall 2009, an English language seminar was held at Niigata University. The class was composed of nine students from several different countries. The purpose of the class was to deepen understanding about Japanese diplomacy and politics by discussing historical issues like the Japan-China War of 1894-1895, the Russo-Japanese War of 1904-05, the Annexation of Korea, Shidehara Diplomacy, the Manchurian Incident, the Tokyo Trial, and the American Occupation. This report covers the purpose, content, methods, experience, problems, and achievements of the seminar.

キーワード：歴史認識 地域研究 異文化間交流 相互認識 自己理解

1. プロジェクトの目的と対象

日本人学生と外国人学生が共通の言語で、歴史認識を議論する場が欲しいと願っていました。ある国において常識であることが、他の国ではまったく受け入れられないことは頻繁にあることであり、言うまでもなく、こうした機会をつうじて、ひとは知識を拡大し認識を深めることができます。日本では茶碗を手に持ち主に箸で食事をしますが、韓国では茶碗を手に持つことは許されず主にスプーンで食事をとります。このような違いは同じ国の異なった地方の出身者の間でさえ、頻繁にあることです。

このような異国、異文化間の交流は、さらに一歩進んで、相手に対する理解を深めることにつながります。ソウルで売っていた小倉アイスを、私と香港の友人は当たり前のように食べたのに、スペイン人やポルトガル人の友人は、「豆が甘いなんて!」と言って受けつけませんでした。彼らにとって、豆は料理の材料であって、豆菓子なんて言語道断だったわけです。相手に対する理解の深化は当然のことながら、自己理解の深化にもつながります。私は小学校の時に「正座しなければ書は書けません」と教わりましたが、では、中国の書道は邪道ということなののでしょうか。日本人は、ハンガルの書道を冷ややかに見ますが、中国人から見れば、平仮名の書だって似たようなものなのでしょう。このように、異文化間交流には、知識や知見を広げ深化させることをつうじて、相手に対する理解を深め、返す刀で自己理解を深める効用もあります。それが結果的に、相互理解を深めることにもつながるのでしょう。

もっとも異文化間交流は、楽しいことばかりではありません。そこには文化摩擦も当然に介在することになります。戦時中捕虜に「ごぼう」を食べさせた日本兵が、「木の根」を食べさせたとして、捕虜虐待で戦犯にされたという話もあります。これなどは手痛い異文化間交流で、「外国人お断り」を掲げる温泉が出現したというニュースも思い出されます。この対応はただけでないにしても、確かに、身体中に石けんの泡をつけたままで湯船に入られてはたまらないでしょう。

日常生活における齟齬の場合なら、経験からの学習も可能ですし、距離を取ることも可能でしょう。ですが、歴史のように価値判断をかなり強く含み、しかも、自身のアイデンティティや、民族の尊厳、国家意識にかかわらざるをえないものとなると、異文化間交流はさらに葛藤を帯びることになります。伊藤博文という政治家の評価は、日本と韓国ではかなりハッキリと異なるでしょう。

歴史認識問題のように微妙な問題に対し、逃げたりせず正面から取り上げて、国籍の異なる学生の間で真剣に議論してみたい。私は、いつからか、こうした願望をもって講義に臨んできました。それは最初は、真実を知りたいというごく当たり前の関心から出発していました。そこには当然に、他者から見た視線を知りたい、自己がどう見えるか知りたい、相手をいっそう理解したいなどの関心が含まれますが、根本的には相互理解を深めたいという願望に発しています。

私の専門は中国研究 (Chinese Studies) ですので、日中を行き来している者同士で話す機会が多いです。そんなとき、お互いの国籍を超えて、それぞれの国の

歴史教育やメディア報道の偏りに気づくことは、稀なことではありません。それを意識することは間違いなく、相互理解の核になるものです。先ずは、そうした偏りを、意見交換によって相互に認識し越えていきたい。出発点にあったのはこうした思いです。私の知る限り、実際に日本に来た中国人のほとんどが、日本に対して良い印象を持ち、中国で培った日本のイメージを修正しています。中国における対日報道の偏りを指摘する中国人学生も少なくありません。このような実情を知るだけに、相互理解の深化は、最低限でも中国の対日イメージの向上に寄与するという確信もあります。

もっとも、本講義に対してはもっと強く意識していた課題がありました。私が念頭に置いたのは、まずは、若い日本の学生たちです。私が学生だった30年前にも、日本人はあまり開放的だったとは言えませんが、ともかくも経済力にものを言わせて、世界中を我が物顔に闊歩していました（現在の中国には、同じ現象を後追いつている面が多々あります。それを冷ややかに見るのは勝手ですが、同時に、深い内省もともなわなければ意味がありません）。しかし、近年では、特に若者を中心に海外に向う意識が壊滅的なほどに萎縮しているように思われるのです。私はその強い原因のひとつを、小泉政権の5年間にすっかりこじれた日中・日韓関係に見定めています。歴史問題に踏み込むことが、「中国、恐い」、「韓国、恐い」に直結するのは、言わば（ポスト小泉）時代の産物かも知れません。首相の靖国参拝（私は憲法違反だと考えます）は、中国・韓国の強い反応を引き出し続けていました。日本に非がある歴史問題は当然沢山あります。しかし、同時に、外国の言論には言い掛かりに近いものも当然あります。あまりに荒唐無稽な議論にまで、下を向いて嵐を過ぎるのを待つことしかできないのなら、萎縮した姿勢が身に付いてしまうのは当然のことです。また、歴史問題について語ることが、ただ単純に中国や韓国への嫌悪感に結びつくだけというのも残念に思いました。

分かりやすく言えば、私は、満洲事変以降の日本は中国を侵略したと思いますし、韓国併合は否定的出来事として捉えます。ですから、これらの問題について、批判を受ければ事実は事実として受けとめ甘んじて受けるべきだという立場です。ですが、それで単純に凹んだりはいしません。他方で、相手があまりにいけだかに接してくるようなら、徹底抗戦します。過去の問題を取り出して、精神的優位に立とうとするのは、よこしまなことに見えるのです。被害者なら何を言っても構わない、ということでは当然ありません。私が日本人であり、彼らが中国人や韓国人であるということは、当然のことですが「私自身」が中国を侵略し韓国を植民地にしたことを意味しません。同時に、いまそこにいる「彼ら自身」が、侵略の被害を自ら体験し、植民地化の屈辱を直接味わったわけでもありません。もち

ろん、歴史の記憶は家族や民族の文化をつうじて継承され血肉化されます。感情的にならざるをえない場面も完全には避けることはできないでしょう。しかし、そこを敢えて越えなければ、結局のところ相互理解は不可能になります。

日本の保守政治家の一部が繰り返してきた侵略や植民地支配を一方向的に正当化する子供のような議論には、胸が悪くなります。自国史であっても、ネガティブはネガティブとして認める。そのところは、謙虚になる必要があります。その上で、あまりに無茶苦茶な批判には毅然として対抗するテクニックはやはり必要です。事実を認めた上での、最低限の護身術としての修正主義（＝見直し論）。これだけは、まずは若い世代に伝えてみたいと思ったのです。そうすることで、ともかくも、臆せず毅然として自国の歴史について、外国人に対峙し議論して欲しいと願ったのです。自分の属する歴史や文化について、ネガティブにしか語れないというのは不幸なことでしょう。但し、それは、白を黒と言いくるめることではないはずで

もうひとつ。韓国恐い、中国恐いから、嫌中論や嫌韓現象へはひとつ飛びますが、話はそれほど簡単でしょうか。そもそも、60年以上も前のことに、なぜ今のわれわれがこんなに振り回されねばならないのでしょうか。韓国や中国が怒るのは、彼らがしつこいからでしょうか？このところは、発想の転換が必要だろうと思います。そもそも歴史問題の責任の根源が、かつて軍国主義の旗を振った人びとにあることは確かです。これが第一。そして、われわれが今日まで、この問題を引きずらねばならなかった最大の責任は、この問題を中国や韓国との間で、外交的にきちんと処理してこなかった日本の戦後政治と外交にあります〔1〕。これが第二です。歴史問題で中国や韓国に批判されて、中国や韓国に腹を立てるのは、ベクトルが違います。ムカツク相手は、上記の第一の責任者であり、第二の当事者であるべきでしょう。それはそのまま、「村山談話」のような、立派な外交的資産を充分に活かしてこれなかったことにもつながります。

後述のとおり、私は中国の大学で、20歳以上も若い学生たちに、日中関係史を教えたことがあります。そのときの心の持ち方は、すでに日本人対中国人を越えていました。日本の若者の偏った、あるいは一面的な歴史認識に対峙したときと同様の姿勢を持って、彼らに対峙することを心がけました。奉職中の本学ですら、講義受講者の90%が外国人ということも稀ではありません。彼らに、日本と彼らの祖国の関係を少しでも正しく伝えたい、そう願うのは自然な感情です。そこには、「日本人として」という限定はつきません。日本人であるにせよ、韓国人であるにせよ、中国人であるにせよ、偏った歴史認識は修正されるべきでしょう。かつての日本との歴史的関係から、彼らの視線にバイアスがかかっているとすれば、それに対峙するの

講義をする者の責務だと思うのです。ただ、ここではやはり技術が必要です。外国人の学生と接する場において、彼らにとって私は先ず第一に「日本人」の先生であり、その反射として、「中国人」の学生として対峙するのが彼らの自然な構えだからです。この状況にあっては、自分が背負った文化的背景やアイデンティティを一步踏み越えてみる必要があるでしょう。日本の植民地支配は冷静に見られなくても、英国のインド支配なら、あるいはフランスのインドシナ支配なら、冷静に対峙してもらうこともできます。ヴェトナム戦争へ韓国軍が投入された歴史を紐解いて、「韓国人は好きになれない」とヴェトナム人が語ったというエピソードは、歴史問題を誠実に考える韓国人には訴えるものがあろうと思われまます [2]。国籍の違う者同士の交流を通じて、私は、できるだけ多角的な相互理解の機会を作りたいと願いました。この際、私は、「日本人の先生」であることから可能な限り距離を置いて、日本を批判する先導役も演じてみました（もちろん、これは教育的配慮で、自説を曲げることは意味を異にします）。この場合には、私は、日本人であることを越えて一人の教師として、彼らに対峙したいと考えています。

同時に、留学生だからこそその深い日本理解を求めたいという気持も強くあります。つまり、彼らには日本学 (Japanese Studies) の専門家であって欲しい。この点では、私はどこまでも地域研究 (Area Studies) の視点に立ちます。彼らの言葉で、あるいは第三言語で彼らに日本を語る私の話などは、所詮は入門に過ぎません。真に日本を理解する外国人の Japan Hands (日本通) 候補者は、日本に暮らし、日本人と遜色なく日本語を操る彼らを除いてはありえません。例えば、ドイツ人と日本人を比べて、日本人の歴史認識の低さはよく語られます。それは、必ずしも間違いではない、と私も思います。特に、妄言を繰り返す大臣、国会議員クラスの人物の程度の低さを見せつけられるにつれ、彼我の違いを思い知らされてきました。ですが、日本人がドイツ人より劣っていると断定するだけでは、誰にでもできる薄っぺらな結論でしかありません。ドイツに比べた日本人の歴史意識の低さの原因がどこにあるのか。流暢な日本語を操る外国人にこそ、その理由に踏み込んでみてもらいたいと思います。極めつけは東京裁判です。日本人の間には、政治的な左右の立場の違いを越えて共通する東京裁判に対するアンビバレンツな感情があります。その反感の内実は、「勝者の裁き」への嫌悪という感情的な反発を越える根深いものです。こういう心理が明らかになると、中国や韓国の世論からは「日本人はまだあの戦争を肯定している」という声上がるのは理解できます。しかし、日本に何年もいる留学生が同じ結論しか持てないとしたら、それは悲しむべきことでしょう。東京裁判を批判する日本人の声の中には、あの裁判が軽すぎた（責任を十

分に追求していない）、という声も当然に含まれているはずで、それを見落とすようでは、正確な日本理解とは言えないでしょう。また、戦後50周年の村山談話の奥の深さを理解している留学生がどれほど居るでしょうか？ 根底的な日本認識、日本人理解に到達できるような、そんなきっかけを留学生に提供してみたい。そういうささやかな野心もありません。

2. 英語での開講・受講者

前置きが長くなってしまいました。講義の内容は、日本政治・外交史 (名称は、Introduction to Japanese Politics I) です。ほとんどの部分は2004年秋学期に北京大学国際関係学院で大学院生と学部学生にそれぞれ中国語で講義した内容であり、その後も、本学の大学院生を相手に中国語で講義してきたものでした。多年にわたる加筆・削除・修正をへて、内容的には、幾分か熟したものになっていったと思います。その意味では、中国人学生のみとはいえ、留学生の視線に十分に晒されてきた内容であり、かなりの批判に耐えうる、多少の心理的備えもあるものでした。英語でも、ある先生と共同で、7年ほどの期間、14回の内、外交の部分4回を毎年講義してきました (今でも鮮明に憶えています。最初に英語で開講をした年には、毎回、講義の間ずっと頭の中が真っ白になっていましたし、身体は汗だくでした。終わったときには、スポーツ以上の虚脱感でした。やがて、3年目ほどから慣れ始めました。それにしても、今回は、初めて14回全部を自分で講義することになり、かなり緊張いたしました)。

講義は、英語で開講しました。中国語の方が遙かに得意なのですが、受講者が中国の学生ばかりでは成果も限られますし、内容から言って、特に韓国の学生の参加をどうしても促したかったのです。2009年度秋学期は、公務出張が異常に多く、結局、1度は協定校である韓国・仁荷大学の丁榮泰教授に代講をお願いし、やっと休講2回に止めたという状況であり、回数の上ではやや不本意なものでした (私は大教室の場合には休講に対しては必ず補講を入れ、14回すべてをシラバスどおり実施しています)。全12講の内容は下記のとおりです。

1. General Introduction to Japanese Politics and Diplomacy :Tribute System, Treaty System
2. Japan-Korea Relations :Guest(Prof. Jung)
3. Constitution of Empire of Japan & Sino-Japanese War 1894-1895
4. Russo-Japanese War 1904-05 & Annexation of Korea
5. Washington Conference, Shidehara Diplomacy
6. Manchurian Incident
7. Tokyo Trial

8. Occupation
9. Japan and Korean Peninsula: Korean War, Japan-Korea Treaty of 1965
10. China-Japan Joint Communiqué of 1972
11. Japanese Diplomacy after Cold War

講義は英語でしたが、シラバスは、英語、日本語、中国語、韓国語で作成しました。英語でシラバスを書くのは共通言語ですから当然です。日本人の学生にも当然参加して欲しかったので日本語、また、留学生の多い順に、中国語（普通語）、韓国語でも作成しました。無限に多くの言語で作ることはできません。日本が、そして新潟大学が置かれている地理的位置を考えると、この4カ国語での表示は当然と思われる。首都圏のJRや地下鉄の駅では、ほぼこの4カ国語で駅名や案内の表示がなされています。大学の国際化を言うのであれば、せめてシラバスの講義名くらいは、この4カ国語で表示されても良いのかも知れませんが、「英語だけで充分。英語すらできないレベルの学生は要らない」という声もあり、それもひとつの見識だとは思いますが、判断の分かれるところだと思います。上記4カ国語での表示は、少なくとも国際化に対する本学の姿勢を示しうるものだと思うのです。

正直言えば、この講義にしても、教師が4カ国語を流暢に扱ってコーディネートできれば、ある意味では理想だったかも知れません。学生も複数言語を駆使して、縦横無尽に議論ができればどんなに素晴らしいでしょう。ただ、もちろん、夢は夢として、現実を自覚することが大事です。現状では、担当教員の能力から考えても、英語のみで行うのが最良の選択ということになりました。私より英語の上手な留学生が沢山いて、随分負い目を感じたのは事実です。しかし、英語によるコミュニケーションはあくまで次善の策であることは自覚する必要があると思います。言語は最終的には翻訳不可能なものだという確信が私にはあります。文系の学問の場合、求められる理解のレベルが上がれば上がるほど、相互理解のためにはやはり相手の言語の習得が必至になるでしょう。地域研究という志向の原点にはこういう発想があります。前述のとおり、英語だけによる日本理解、また外国語をとおした日本理解は、所詮は入り口に過ぎません。

なお、韓国の教授に1回の代講をお願いしたことは、結果的にはポジティブに作用したと思います。同教授は、韓国人の日本に対する複雑なセンチメントについても言及して下さり、学生の反応も良好なものでした。

講義は、法学部、現社研、国際センターの3つの顔を持ったものでした。この点の良否についてはここでは言及しません。ただ、そのおかげで、国籍構成の点で比較的バランスの取れた学生たちが受講してくれました。それは今回、この試みの最大のアドヴァンテージだったと言っても過言ではありません。

受講者の内訳は、中国人2名、ロシア人2名、韓国人1名、台湾人2名、ミャンマー人2名、日本人1名という、各国1～2名のかなり理想的なものでした。また、文系から理系まで、専門の点でも幅の広い学生構成になりました。欲を言えば、韓国人がもう1人、また、インドシナ半島からの学生にも居て欲しいと思いました。一番残念だったのは、日本人の学生があまりに少なかったことです。

もっとも、問題点がなかったわけではありません。端的に言えば、議論の土台になる基礎的な知識の個人差には戸惑うこともありました。国際連盟やポツダム宣言についての説明に時間を取られることもなかった訳ではありません。また、英語力にもかなりの開きがありました。そこは、結局、丁度中間程度のレベルだった担当教員の英語のレベルに収斂していくことになりました。

当初は、英語圏で作成された映像を見て、感想を話し合うというラフなスタイルを想定していました。しかし、いざ捜してみると、日本や日本外交についての英語の映像教材が極めて少ないことに気づきました。正直、驚いたほどです。そこで、実際には、教師が基本的には講義を行い、一定の問題提起をして、話し合うスタイルに変えて講義を実施しました。

講義では、簡単なレポートを3回書いてもらいました。議論の参考にするためです。2回は宿題にしましたが、1回は講義中に書いてもらいました。講義中に書いてもらうのは明らかに失敗で、私の想定していた時間の倍以上かかり、講義時間が足りなくなっていました。この点は戒めとする必要があると思っています。

3. 準備の程度と講義の実際

講義では、かなり冒険して、繊細な問題も扱いました。教員にとっても危険な試みでしたが、やってみなければ始まらないという確信犯の意識もありました。価値判断が極端に分かれる問題ばかりでしたので、丸投げで問題提起や議論をするのは無責任でした。

個人として言えば、2004年秋学期に、北京大学で半年の日中関係史の講義をするにあたって、1年半ほど掛けて準備をしました。その後も、5年間毎年、本学大学院において同じ内容を中国語で開講し、短いながらも英語でも開講してきたことで、応分の準備はできていたものと考えられます。争点について、異なった解釈を明示し、比較的安全でバランスの取れた複数の見解を用意しておくことは必須と思われます。もちろん、異なった解釈といっても、外国のものはフォローしきることもできず、正直言えば、学生の示した見解によって、何度も目から鱗の思いを体験しました。また、学生に課したレポートにもとづいて、特定の問題についてのクラスの各学生の考えを、賛成派何人、反

対派何人という数値にして提示し、議論の参考にしたりしました。もちろん、学生のレポートをそのまま教材にする場合は、それによって学生が特定されないように、細心の注意を払って行いました。

最初のレポートで問うた事例は、以下の6問です：
 (1)日清戦争は侵略戦争だったのか？；(2)韓国併合は合法か非合法か？；(3)日本軍国主義の転換点はいつか？；(4)アメリカの日本占領の目的は何だったか？それは達成されたのか？；(5)1972年の日中共同声明をどう評価するのか？；(6)日本社会、政治、外交をどう評価するのか？（6番目の問題が具体性に欠けたことは自覚しています）

正直言えば、「東京裁判」についてはさすがに触れる決心がなく迂回しようとしたのですが、始めてみると、クラスのムードがあまりに良かったので、思い切って取りあげてみました。そこで、(7)東京裁判は公正だったか否か、合法だったか否か？が付け加えられました。また、偶然から講義で言及し、触れることになった事例に(8)朝鮮半島の分断は日本の責任か否か？があります。

いずれにしても、扱い方によっては、学生自身やその帰属国の尊厳にかかわる問題です。当然、神経質にならざるをえません。また、学生が遠慮したり、躊躇ったりしては意味がないので、一番気を使ったのは、私自身の姿勢とクラス全体のムードです。つまり、自由に発言できる環境を保障することが大事で、これが実現できなくては、この種の講義には存在する価値がありません。そのためには教員の側が、あまり強く反論しない、論争にできるだけ与しないようにすることが肝要だと思われまます。また、学生たちにとっては、教員はあくまで日本人ですので、教育上の技術＝演技は必要だと思われまます。日本の世論・政府の代弁者でないことを過度に強調することは不可避でしたし、自分の主張をどこかの国の観点に重ねて述べることも技術としては必要でした。もちろん、どこまで成功したかは心許ないわけですが。

以下に、議論の結果の一例を示しておきます。

「日清戦争は日本の中国侵略の始まりだと思いませんか？」という問に対し

○11月初めの時点では、満洲事変以降が侵略だと回答した1名と回答不能とした1名を除いては、残りの7名が、日清戦争は当然に侵略だが、日本の中国侵略をもっと早い時期とみなす回答を示しました。侵略開始時期についてのそれぞれの見解は以下のとおりでした。

1931・37	満洲事変や日中戦争	1名
1895	日清戦争	3名
1876	江華島条約	1名
1874	台湾出兵	2名
1780(? 1609)	薩摩の琉球支配の開始	1名

回答不能 1名

○2月末の時点では、日清戦争が日本の中国侵略だと答えた学生は1名に止まり、残り全員は、日本の一方的侵略ではないという視点を示しました。特に、朝鮮半島を巡る日本と中国の覇権争いだという観点を7名の学生が支持しました（7名のうち1名は、日本の朝鮮侵略の始まりである、と指摘しています）。

日清戦争は、日本による侵略戦争	1名
日清二大強国の朝鮮半島を巡る争い	7名
日本は清朝に挑戦しただけ	1名
侵略ではない	1名

4. 自己評価

決して短くはない1学期間、長丁場の試合でした。初めてのすべて英語の講義であるうえ、海外出張が多く十分な準備の時間がとれないなどの悪条件が重なり、辛うじて乗り切った、というのが正直な感想です。乗り切れたのは、なんと言っても、良識ある学生たちのおかげで、彼らの協力には大いに感謝しています。今回の問題点としては、事前の計画と資料配付が不十分だったことがあげられます。英語の資料もいろいろ作ってあったので、講義の1週間前に渡せば良かったのですが、内容の検討が後手に回って、結局最後まで、資料の配付は講義後になってしまいました。この点は大いに反省しています。隔年開講ですが、次回以降は、改善可能だと思います。こうした試みの成否は、かなりの程度メンバー次第などところがあります。今回は国のバランスも良く、何度か緊張する場面もなかったわけではありませんが、総じて協力的な学生に恵まれて本当に助かりました。

複数の国の人間で議論するメリットは何度も感じました。例えば、「日清戦争は、日本の侵略だ」と強硬に断言していた学生は、日清戦争の際に日中間の争点が朝鮮半島だったことに気づき、さらに、クラスのメンバーに韓国人が居ることを意識したときに、語気が変わり、沈思する機会を得たように思われました。また、「朝鮮半島の分断は日本の責任だ」という見解が韓国にあることを紹介すると、「何でもかんでも日本の責任にするのは良くないでしょう」という発言が別の学生から示されました。総じて、この講義は、多くの学生の熱意と、寛容な精神、忍耐強い相対化の努力によって比較的上手く運営されたものだと考えます。それほど、このクラスはムードの点でも申し分なかったと言うべきですが、それでも、北方領土問題と東京裁判にはやはり深入りできませんでした。繊細にすぎる問題であることはもちろんですが、自分がどこまで日本人としての想いにクールで居られるかにも、完全には自信が持てなかったのです [3]。

また、どんな講義でもそうですが、特定の観点を植え付けてしまう怖さも感じました。前述の日清戦争をめぐる観点の変化などは、偏見の修正に属することだと思われるものの、講義をとおしてこれほど明らかな変化があると、それはそれで考えさせられるものがあります。もちろん、明らかな偏見を修正することは、大事なことで、そうした役割が果たせるなら、それはそれで続ける意味はあるということになるでしょう。

もちろん、最後は価値判断の問題になる事例も多く、歴史認識問題を取り扱うことの難しさを改めて認識しました。例えば、「殖民地」支配の問題は、殖民地支配を受けたことのないわれわれには、やはり理解を超える問題なのでしょう。韓国併合条約が国際法的に合法か否かなどと言った搦め手の理屈のレベルでは、到底理解されえないし、越えられない問題だと強く感じました。また、こうした問題を話すときには、学生たちにとっては、私はやはりどこまでも「日本人」の先生だったのです、この壁には常に意識して立ち向かいましたが、ついに突き崩せなかったのは私の力量不足ゆえかも知れません。

註

- [1] ビル・エモット『アジア三国志』（日本経済新聞社、2008）の第7章「横たわる歴史問題」（241-274頁）、特に、263-264頁を参照されたい。
- [2] 例えば、2007年公開の日韓合作映画『あなたを忘れない』（花堂純次監督）の中にさりげなくこのエピソードが挿入されている。同映画は、2001年の大久保駅乗客転落事故に取材したものである。ヴェトナム戦争と韓国との係わりについては、連載記事「2001年のナショナリズム 日本の予感①」（『朝日新聞』2001. 3. 17）を参照されたい。
- [3] 本稿で言及した主要な歴史認識問題についての筆者の基本的な観点については以下を参照されたい。「日中和解の文書としての日中共同声明：対中外交と歴史問題」『環日本海研究年報』第15号、2008年2月。また、歴史認識問題に関する筆者と米国、中国、韓国の専門家による共同研究の成果として、以下も参照されたい。Peter Hays Gries; Qingmin Zhang; Yasuki Masui; & Yong Wook Lee, "Historical Beliefs and the Perception of Threat in Northeast Asia: Colonialism, the Tributary System, and China-Japan-Korea Relations in the Twenty-First Century," *International Relations of the Asia-Pacific*, 9.2 (2009): 245-265